えんちょう通信

No.５３
令和 ３年１０月２０日
福島市立清水幼稚園
発行者　佐藤 一男

秋の遠足

１０月１５日(金)、年少組、年長組のみんなで、「秋の遠足」に出かけました。タワースライダーのある松川工業第一公園に行きました。８時４５分、バスに乗って出発です。子どもたちは、２台のバスに分かれ、２人掛のシートに一人ずつ座って、乗りました。子どもたちは、バスが動き出すと、「うわー、たかーい！」「バスって、おおきいんだね。」と大喜びです。西道路を通って４号線を松川に向かって南に走ります。バスの中ではお話はしない約束になっていますが、嬉しくて仕方がないようです。一番後ろのシートに座っている私の顔を見て、ニコッと笑います。しばらくするとまた後ろを見てニコッと笑います。

９時半ごろ、松川工業第一公園につきました。素晴らしい青空が広がっています。安達太良山の山頂まできれいに見えます。

ブルーシートに荷物を置いて、さっそくタワースライダーで遊びはじめました。長い滑り台を滑り降りて、また昇り、何度も滑っています。友だちとつながって滑って、大騒ぎです。最後に、みんなでおせんべいを食べて、帰ってきました。この公園に、これまでに何度も来ている子もいますが、みんなで来ると、また違う楽しさがあります。

みんなで同じバスに乗る、一つの遊具でみんな一緒に遊ぶ、そしてみんなでおせんべいを食べる。そういう共通の経験をもつことで、子どもたちの心はつながっていきます。

周りの大人の「応答」が子どもを育てます

こだまでしょうか
金子みすゞ

「遊ぼう」っていうと
「遊ぼう」っていう。

「ばか」っていうと
「ばか」っていう。

「もう遊ばない」っていうと
「遊ばない」っていう。

そうして、あとで
さみしくなって、

「ごめんね」っていうと
「ごめんね」っていう。

こだまでしょうか、
いいえ、誰でも。

コロナ禍の中、人との関わりはどうしても少なくなってしまいます。

子どもたちが豊かな言葉を身に付け、優しい心をもつようになるためには、人とのかかわりがどうしても必要です。特に周りの大人の「応答」が大切だと言われています。

金子みすゞの『こだまでしょうか』という詩があります。この詩の解説に次のようなことが書いてありました。

「こだまとは、自分の言ったことを、相手が丸ごと受け入れて、返してくれることです。友だちが転んで『いたい』と言ったとき、『いたいね、だいじょうぶ』ときちんと「こだま」してあげられるといいですね。」

子育てや幼児期の教育で最も大切なことは、子どもに寄り添って「こだま」してあげることだと思っています。それが子どもの心を育てていきます。そして豊かな言葉を育みます。